後藤新平と福沢諭吉

――伝染病研究所移転問題をめぐって――

小川原　正道

一、はしがき
二、伝染病研究所移転問題をめぐる福沢の対応
三、長谷川泰の演説
四、後藤の態度と福沢宛後藤書簡案
五、結びに代えて

一、はしがき

後藤新平は没後の一九三四年（昭和九年）に刊行された「男爵後藤新平氏直話」で、福沢諭吉との出会いについて、次のように回想している。

私が初めて福沢先生に面会したのは、名古屋病院長時代で、明治十一年であります、此時上京して駿河台なる長与専

斎の宅に参つたらば、先生が来て居られましたが、私が長与氏と一と議論やつて居るのを聞いて、先生は大に私に賛成しました、夫れは日本には小彦名尊より以降、我が国固有の医術がある、其後支那より漢方医術が来り、西洋より西洋医術が来つて、此日本固有の医術に刺戟を与へ、又は改良を促した事はあるが、之れを以て我が医術を忘却することは出来ない、即ち漢方医も西洋医も皆固有の医術に合して、日本の医術となつたのであると云ふ論旨でありましたが、福沢先生は之れを聞いて長与は負けだ、一言もないと申して、酷く気に入つてやうでありました。(1)

長与専斎を介して出会った両者はその後交際を重ね、一八八四年（明治十七年）頃には、朝鮮改革のために後藤象二郎と長与、福沢とが評議した際、象二郎か新平を朝鮮に派遣することになり、福沢は新平を推したという。その後も福沢は後藤に、時事新報や慶應義塾の経営を任せる意向を示していたようで、後藤は「先生も本気で何か私に遣らせるつもりであつたらしい、私の考では、福沢先生はサーチライトのやうな人で、人間を一目見れば、其全体を奥底まで照らすと云ふやうな能力を持つて居たやうに思はれます」と述べている。(2)

後藤によれば、北里柴三郎が伝染病研究所を設立した際に内務省衛生局長として大いに尽力したものの、「芝区民の反抗は凄まじいもので、私が暗殺されはせぬかなど云ふ心配があるので、或る時福沢先生の処へ参つたら、先生は余程臆病な人だと見え、後藤君大丈夫かね、俺の家へ来て、門前で殴られでもすると困るが、大丈夫かねと言って、何度も念を押されたことがありました」という。(3)

もともと、後藤はドイツ滞在中から、北里が帰国後に彼を中心とする研究機関を設ける運動を推進していたが、帝国大学医科大学派の反対を受けて暗礁に乗り上げてしまい、恩師のロベルト・コッホが医科大学出身者を冷遇し、さらに北里自身が医科大学長・大沢謙二からの勧誘を辞退したことで、北里と医科大学側との対立が決定的となる。これによって頓挫した研究機関設置構想を救ったのが、福沢であった。(4)

長与の自伝によると、長与から北里の実績と不遇について聞いた福沢は「なるほど君の云うところの如くならば、前途に望みなきものにもあらざるべし、果たして研究の価値あるものとすれば実に惜しむべき恨事なり、学事の推挽は余が道楽の一つなり、私力を以てその手始めをなすべし、幸いに芝公園内に所有の地所もあれば、ここに必要だけの家屋を構え、ともかくも試験の事を始められよ」と語り、北里との相談、森村市左衛門からの寄附などを経て、芝区芝公園に伝染病研究所が設立されたという。(5) 一八九二年十一月のことであった。しかし、翌年にこれを芝区愛宕町に移転しようとしたところ、激しい地元からの反対運動が起こり、福沢はその鎮静化に尽力して、これを収拾することに成功する。(6)

後藤が回想する、伝染病研究所に対する激しい芝区民の抵抗と暗殺の危険は、愛宕町への移転をめぐって起きたものであろう。事実、「後藤新平文書」には、後藤の福沢宛書簡案と思われるものや、長谷川泰（後藤の後任として内務省衛生局長に就任。医師。当時は衆議院議員）が福沢の動静に言及した後藤宛書簡など、移転問題に関連する資料が数多く含まれている。

後藤自身、「吾輩は幾度か親しく先生と談論するの機会を得たが、其都度先生の偉大なる人格に触れて、尊敬の念を深くするに至つた」(7)と福沢について述べているが、後藤と福沢との関係についてはこれまで、ほとんど論じられたことがない。そこで本稿では、同問題をめぐる福沢と後藤の対応、および両者の関係性について、「後藤新平文書」などを用いて考察していきたい。

二、伝染病研究所移転問題をめぐる福沢の対応

一八九三年四月一日、福沢は北里宛書簡において、「芝区之物論穏かならざるよし……渡辺洪基方へ手紙を遣

し候処、事実ハ安心なれとも、凡俗之感情如何ともすへからす云々之旨、返詞申参ニ付、最早致方無之、明日之時事新報へ、少々筆鋒を鋭くして一言致候積り」と述べ、芝区民が移転に反対する中、伝染病研究所移転反対派の衆議院議員・渡辺洪基に書簡を送ったところ、渡辺自身は納得したものの区民の感情は抑えがたいと返答してきたため、明日の『時事新報』で筆鋒鋭く一言するという。(8)

かくして四月二日、『時事新報』に「伝染病研究所と近辺の人民」と題する記事が掲載された。ここで福沢は、伝染病研究所移転に反対する人々は、「同研究所設置に就ては病毒伝播の恐あれは近辺の人民は皆他に立退き従て地下下落するに至るべし」と懸念しているとした上で、「是は大なる間違」であると述べ、同研究所ではコレラや天然痘などの治療はせず、コッホの医術によって肺病やジフテリア、腸チフスなどを治療するとして、「殊に病毒消滅法は細菌学者の最も厳守する処にして且つ最も得意とする処なれば病毒伝播の恐なし」と論じた。福沢は、研究所を設置すれば「識人輻輳し土地の繁昌を来すを以て一日も早く其設立を望む程なり」とメリットを強調している。(9)

さらに福沢は七月五日から七日にかけて『時事新報』に「伝染病研究所に就いて」と題する社説を連載し、移転反対派の論理を「区内に此種の研究所を設けらるゝときは伝染病の患者は陸続」として集まり、その結果「近傍の営業商売に容易ならざる影響を蒙るに至る可しと云ふに外ならず」と整理し、医学の進歩によって肺結核は伝染病とは位置付けられなくなっており、これをコレラや腸チフスのような「激烈」な伝染病と同一視すべきではなく、「芝区の人民が肺結核病の研究を目的とする研究所の設置を危険なりとして之に反対するは果して如何なる理由なりや我輩の解せざる所なり」と論じた。また、肺結核の患者は東京に五万人おり、芝区民の家族や同居人のなかにも患者がいるに違いないとして、「伝染病云云の名を耳にし其実を究めずして忽ち之に反対し家に居ては無害に安んじながら戸外に出てゝ有害を喋々するとは余り軽率にして辻褄の合はぬ談なりと云はざるを得

ず」と苦言を呈し、伝染病研究所を危険とする口実を許すことは「俗間に肺病患者を嫌はしむるの端を開くもの」であり、患者に身体的苦痛に加えて精神的苦痛を与えることになるとも述べている。[10]

八月十一日・十二日、福沢は『時事新報』に社説「伝染病研究所の始末」を掲げた。移転反対派と大日本私立衛生会との交渉の場が設けられたが不調に終わり、これを受けて北里は七月十六日に衛生会に辞表を提出、同紙はこれを全文掲載した。辞表のなかで北里は、「今日柴三郎に於ては所謂天を怨みず人をも咎めざるものなれども唯此に難渋至極なる次第を申さんに研究所移転の議芝区に起りてより以来俗談の為め学情を妨げらるゝの一事なり」と記し、「我が黴菌学の業」は「至細至微」で「精神の静粛を要する事業」であり、これ以上「俗事」に心身を費やしたくはないと述べている。これを受けて福沢は、「俗談の煩はしきに堪へず其煩はしきが為めに貴重なる時を失ふて研究の事を等閑に附するは学者の本分に非ざる」ことだと同意した上で、「国家の眼を以て我医事の大勢を視察し其消長如何を思へば無限の憾に堪へず」と訴えた。[11]

この北里の辞表は反対運動を抑え込むために福沢が書いたもので、七月十四日付の北里宛書簡で福沢は、「昨日御話之辞表ハ、今朝少々閑を得たるニ付、老生試ニ執筆致居候。出来候上ハ試ニ入御覧、長与氏とも相談致度存候……結局辞表ハ上策にして、今正に機会と存候」と記していた。[12] この辞表が区民の心を打ち、反対運動が鎮静化して移転が実現したとされている。[13]

三、長谷川泰の演説

伝染病研究所の設立は、中央衛生会の長谷川泰、高木兼寛、石黒忠悳などの建議にも端を発していたが、「医科大学派」は文部省の研究所設立案を立ててその経費を予算に計上し、帝国議会に諮ったため、後藤の意を受け

た長谷川ら「衛生局派」はこれを否決して研究所補所費建議案を提出した。一八九三年二月二十三日、衆議院は満場一致で研究所補助費建議案を可決し、政府側も同意して二万円が一八九三年度に補助されることとなる。長谷川は移転反対運動の鎮静化にも努めたが、運動は苛烈を極めており、福沢から研究所の土地建物一切を貸与された経営主体である大日本私立衛生会の会頭・土方久元や福沢、長与などへの殺害予告が寄せられ、同年四月四日、私立衛生会が伝染病研究所病院設立願を提出すると、東京府知事の富田鉄之助は、「伝染病」の名称は公衆の感情を害するとして、その三字を避けて名称変更の上再度申請するよう指示している。長谷川は後藤に対し、議会が補助金支出を可決した以上、名称変更は補助金の消滅を意味すると警告したが、後藤の女婿である鶴見祐輔は、富田の指示は「主として長与専斎が関係したように思はれる」としている。(14)

長谷川は五月二十二日の大日本私立衛生会臨時常会で「伝染病研究所は市内に置くも妨けなし」と題して演説し、『時事新報』は一八九三年六月四日付・六日付附録として、長谷川の演説全文を掲載している。(15) 長谷川の演説は、芝区民から殺害予告が届くほど猛烈な反対を受けたものの、警察が厳重に護衛して実施された。『長谷川泰先生小伝』によれば、「演説会は未曾有の盛況を極めたり、杏林界の人士は勿論、反対派の芝区民亦多数に来会し、聴衆外に溢れ、当時政談演説に見たると同様多数の警官出張厳戒の下に開催せられたり」という。(16)

『時事新報』掲載の演説筆記によると、長谷川は反対論の先頭にいた末松謙澄（法制局長官）を厳しく批判し、「私は氏（末松――引用者）は衛生上其他欧米諸国に於ける都府内の伝染病研究所或は病院と云ふ者は如何なる所へ近来は建るかと云ふことを御承知がないから、斯様な御迷論が出たのであると私は考へる……海外文明国欧米諸国に於ける病院建設の始末、如何なる所に如何なる病院かあるかと云ふことを御承知になりましたならば、よもや伝染病研究所は東京市内に置く可き者でない或は總ての病院は、郊外の即ち草茫々たる所の原野に放逐す可しと云ふ様な御論をなさることはないと考へる」として、ロンドンとベルリンの病院の配置について地図を示し

ながら詳細に紹介し、「末松博士の妄誕も亦極れりと云ふべし」と攻撃した。さらに、伝染病研究所ができると地価が下落するという主張について、富裕層が北里のもとで治療を受けたがるので「芝区に間接に利益を来すに相違ない」と反論し、愛宕町には高木が院長を務める東京慈恵医院があって肺病患者を受け入れており、「伝染病研究所を置くことが出来ぬと云ふをならば高木博士の病院も殆んど雄犬の声相聞えざる所の原野にでも放逐すべしと言わるゝ」はずなのに、反対論が起きないのは、「其院長は薩州本場、天下の大権を握つて居る薩長政府の高官たりし正四位勲二等医学博士高木兼寛君である」と高木が「特殊の保護」のもとに「治外法権」的地位を占めているからだと批判している。富田の名称変更指令についても、「末松博士等の精神と同じく伝染病研究所を撲滅しやうと云ふ精神ではないか」と指摘し、内相が直ちにこれを取り消すべきだと主張した。(17)

演説の二日後、長谷川は後藤に対して書簡を送り、研究所移転問題が明日、東京市参事会に提案されるとした上で、「福沢氏と東京市との間に特約も有之候趣なれば、仮令市参事会ニ於て決議候とも如何可有之哉抔、先刻山県氏申仕候。願クハ福沢氏に御面談之上、其辺之処篤と御協議被下度奉願候」と書き送り、参事会と福沢との間に「特約」があるようなので、福沢と面談して協議してほしいと要望している。(18) 福沢が東京市参事会との間で移転の内約を取り付けていることを察しての発言であろう。

四、後藤の態度と福沢宛後藤書簡案

後藤の伝染病研究所移転問題への対応はどうであったか。『北里柴三郎伝』は、「先生の帰朝するや之を迎へて其の目的を達せしむべく斡旋したのは実に後藤其の人である。……帝国議会に於ける政府の補助問題や、芝区民の伝染病研究所設置反対運動抑圧などに関して、裏面に後藤の活動したことはいふまでもない。常に後藤は政治

的に働き、先生は学術的に努力して、遂に所期の目的を達し、大学派をして顔色なからしめたことは、両者が一致協力の結果である」と、後藤が全面的に北里を支援し、議会での補助費建議案の成立や移転反対運動の鎮静化などのために裏面で活躍し、医科大学派に対抗したと述べている。(19)

当時、東京慈恵医院に勤務していた金杉英五郎は、次のように回顧している。

伝染病研究所を芝に建てようとしたときに、非常な反対が各方面から起った。ことに芝の町民は、こんな危険なものを建てられては困るというので、激烈に反対した。そうすると、衛生局長の後藤伯（爵）が、一日属官にむかって「あの伝染病研究所の敷地の前に建てである看板に、今晩行って、墨をいっぱい塗って来い。」と命じた。これを聞いた属官は、非常に吃驚したが、何しろ長官の命令だから、夜陰に乗じて、その通りにやって来た。するとその翌日、町の人が起きて見て、大騒ぎになった。実に卑劣千万な事をする人間があるものだ。いかに伝染病研究所に反対すればとて、政府が建てた立看板に墨を塗るとはけしからん、と町民の輿論は反対の方に変ってしまった。そのお陰で、伝染病研究所は、今建っている処に、できるようになったのである。(20)

伝染病研究所の看板に墨を塗らせるよう部下に指示し、反対派の仕業と考えた町民が移転賛成に転じた、というわけである。鶴見は、「この話は、伯の口からもしばしば聴いたことがある」という。(21)

反対派の末広重恭は一八九三年十月十日、後藤に対して、「芝区伝染病研究所之儀ニ付、愈よ区民之意見を排斥して御断行ニ相成り候由、先頃衛生会ニ於て御面会いたし候際、区民之輿論を御採用無きに於てハ小生之舌と筆を以て当局者之不当を天下ニ鳴すべき旨御約束致し置き候故、去る七日弥生館ニ於て為したる演説之筆記を国会紙上ニ掲け、今日と明日之分進呈致し候間、御一読被成下候得は仕合セ之至りニ存候」との書簡を送り、区民の「意見」や「輿論」を無視して移転を「断行」すれば、舌と筆で攻撃すると予告していた通り、演説を行った

として、その筆記を送っている。[22] これに対し後藤は同日付の末広宛返信で、演説筆記には「芝区民」とあるが、「小生之方ニ参り候ものは区民の名濫用を憤り、是も区民中二三子の為メ少数之人左右せられ候なと申来り居候」と、自分のもとを訪れた芝区民は反対派が区民の名を濫用していると憤り、彼らは「二三子」に煽られているだけだと語ったとして、末広が、「芝区全体の人民」が反対しているように述べていることに疑問を呈している。[23]

後藤が移転推進の立場にいたことは明白であろう。鶴見は「こうした囂々たる反対の声のなかに、連日連夜、工事を督励し、遂に翌明治二十七年（一八九四）二月七日付をもって、伝染病研究所は工事の完成を告げた」と後藤の姿を描いている。[24] ドイツ滞在中から北里に期待を寄せていた後藤にとって、こうした行動は当然のことであった。

このような態度の後藤が、同じく反対派を批判し、北里を支援していた福沢と接近するのは、当然であった。後藤は一八九三年九月二十七日に記した書簡の下書きで、次のように述べている。

御紙上之趣我御研究所一件は、仮令何人之密計有之候とも小生ニ於テ已ニ此件ニ進退ニかけ断行ニ仕旨先生ニ申上置候上ハ、必決行可致候。小生は強言弱行之徒ニ無之、竊ニ確言断行ヲ以テ自ラ許し仕候。敢一旦過日の如キ進退ニかけ引受候上ハ尚衛生局長タリ。又衛生会評議員タル間ハハ断乎決行可致。若し会頭其説ニ服サスンハ、会頭ヲシテ辞サシムルカ自ラ辞任スル。否進テ此事内務省ノ議ニ出候ハ、自ラ信ンスル所ヲ陳シ断行スルの否レハ決然定説ニ可申ト存候。来ル常会ノ事モ強ク願置候得共、右之次第ニ付キ御演舌被下候ハ、無此上幸福ニ御座候。[25]

この書簡案は宛名を欠いているが、封筒に後藤新平伯伝記編纂会によるメモ書きがあり、宛先と思われる文中の「先生」について「（福沢翁？）」と記し、「書出しの『御紙上』とは時事新報をさしたるに非ずや『必ず決行云々』とは彼の伝染病研究所設立件に非ずや」としている。後藤自身が伝染病研究所をめぐる「用談」のため福

沢と「対面」したと述べていること[26]、長谷川が福沢との「協議」を求めていたこと、『時事新報』が当時、積極的に反対派を難じる論陣を張っていたことを考慮すると、これらの推測はいずれも的を射ているといってよかろう。『時事新報』が後押しする研究所の移転に進退をかけ、これを断行する旨を福沢に伝えていた後藤は、改めて「決行」「断行」する決意を示し、大日本私立衛生会会頭の土方が同意しなければ会頭職を辞めさせるか自らが辞任するとして、内務省内の会議で自説を主張したいとの意欲を示している。常会についても強く依頼してあり、演説してほしいと期待しているが、この後、十一月二十五日に予定されていた同衛生会常会は帝国議会招集と重なったため、翌月十六日に延期され、そこでは長与と警察医長の山根正次が演説している[27]。当初は、福沢に依頼していたのかもしれない。

こうして後藤は移転問題に「裏面[28]」から働きかけ、福沢との連携も見られたわけである。

五、結びに代えて

後藤と福沢は、北里を軸として、政府の内と外から伝染病研究所の移転を支援し、これを実現した。共通の敵は反対する芝区民であり、それを代表する末広重恭や末松謙澄、渡辺洪基などだったが、帝国大学医科大学という巨大な存在も研究所の主導権を握ろうとしていた。後藤と福沢を架橋したのが長谷川であり、後藤と長谷川は「衛生局派」として基本的立場を同じくしていた。後藤が後任の衛生局長を長谷川に託したのは、そうした信頼のあらわれであろう。長谷川は幕末に福沢の塾に学んでおり、『時事新報』は長谷川の伝染病研究所移転に関する演説を全文掲載している。志村俊郎と都倉武之はこれらを踏まえて、福沢と長谷川の「両者がこの問題で深い協力関係にあったことを示唆している」と指摘している。福沢が北里の辞表を代筆した際も、福沢は松山棟庵を

介して長谷川とやりとりしており、長与の反対運動への態度についても、長谷川は福沢が長与の真意を尋ねるよう松山に依頼していた。[29]

後藤自身、「伝染病研究所設立に関する用談」を機に福沢と親しくなり、尊敬の念を深めたと述べているが、[30]その後の両者の関係、また後藤の福沢観はどのように展開されていったのだろうか。

後藤と福沢はこの後も交際を続けており、一八九八年八月十五日付で台湾総統府民政長官の後藤が福沢に宛てた書簡では、台湾への出発前に福沢のもとを訪れたものの来客中で会えず「遺憾」であったこと、台湾到着後、後藤が「行政の大局面には経験固より無之」のため「唯小心服務候のみ」という心境で、「幸に児玉総督の指示に遵ひ今日まで勤」めていることを述べた上で、台湾は「通商的戦争に勝を占むる要地に有之、商業的コロニーのステーションとも可申、帝国将来運命も台湾統治と相関する所不少は申上候までも無之候」と台湾統治の重要性を述べ、「所謂自称台湾通」などの「台湾所見」が「頗る真相を得ざるもの多」いため、総督府が新聞記者に便宜をはかり、「台湾官民実況変遷の写真を公にし」たいとして、「時事新報より先生御信任ある記者、本島へ派遣、写真せしめられ候事不相叶候哉」と記者の派遣を依頼している。後藤は台湾統治の「第一着」として「台湾写真を出し」、その上で統治の「計画」を示したいとの意欲を語り、「先生の御高見如何に可有之歟」と尋ねている。[31]福沢への厚い信頼と『時事新報』への期待と評価が、継続していたことがうかがえよう。

後藤の福沢観についても見ておきたい。一九二〇年（大正九年）一月十日、拓殖大学学長の後藤は、慶應義塾で開催された福沢先生誕生記念会での講演で「日本文明ノ偉人ニ謝ス」と題して語っている。その原稿では、福沢を「天爵ノ碩儒大聖ナリ大常識ノ先達科学ノ信者縦横脱線ノ達人」とし、「教育家トシテハ活教育ニシテ死教育家ニ非ラス」、「資金自給ノ教育家」であって当時の学究としては卓越していたと記されている。朱筆で「楠公権助論」「かたわ娘」「拝金宗」「帳合ノ法」とも書き込まれており、民間において科学を信じ、常識を覆して実

学を奨励した教育家として認識されていたことがわかる。さらに、「福沢先生ハ西洋文明ノ日本的同化セシメラレタ」として、聖徳太子は仏教を「日本的ニ同化」し、伝教・弘法大師は仏教を「王法化」し、法然と親鸞は「超世的ナル仏教」「印度思想」を「現世的ナル日本思想」に変化させ、一条兼良や山崎闇斎らは「儒教ヲ神道化」し、福沢は彼らに譲らず、むしろその「上ニア」って「現代日本文明ニ貢献」したと強調している。さらに、「其内在ノ精神ハ継続シテ実在デアル所精神ノ欠ル処全産業制度構造ハ解体スルモノデアリ、政策ノ現状然リ」として、福沢は実在する精神を欠いた産業制度は解体するとしたとし、「産業指導ノ責任アル人々ハ其責任ヲ遂行スルヨリ以上高等ナル愛国心ハ有ハ得ナリ又之ヲ等閑ニスルヨリ以上ノ罪悪ハ無イ」と、産業を指導する責任がある人々は、その責任以上に愛国心を持たねばならないと考えていたという（傍点原文）。西洋文明の日本化、それによる日本文明の創造、愛国心を備えた産業指導こそが、福沢の最大の思想的貢献とされたのである。(32)

逓信大臣時代の一九一一年に刊行された回想でも、福沢が「非常に科学といふものを重視」し、西洋思想、すなわち科学と適合するものを積極的に採用して社会を導こうと試み、「平易なる文字を以て、高尚なる学理を説くことに努めて居られた」点や、「世俗」を念頭に置いて「文明の恩沢を一般世俗の上にも行きわたらせやうとして、努力奮闘せられた」点が、ほかの学者と異なるところであったと後藤は述べている。福沢の特色は「学問と常識との調和」を追求した点にあり、その特殊な能力は「消化力」、「鋭敏なる理解力」にあるという。後藤は福沢の卓見として、「時代の趨勢を達観して商工立国論を唱へた」ことや「国会開設論」「通商貿易論」に関する「預言」を挙げ、「明治に於ける無冠の救世主である」と評している。同時に、福沢の門下生が十分に福沢の価値を見いだせなかったために、「俊傑」が輩出されなかったと難じ、それが「先生の生涯に於ける一大不幸と云ふべきである」として、「天下の大平民」として「帝国大学に拮抗しやう」とした福沢が亡き後の慶應義塾には、あまり期待を寄せていない。(33)

世俗の問題から目を背けずに文明の構築と普及に貢献した、在野の科学的・実学的教育家としての評価の背後に、民間の立場から北里の研究活動を支援し、その科学的成果を期待した福沢への好感が存在していたことは、想像に難くない。それは、医師として、官僚として、政治家として、日本の文明化を希求してきた自らの軌跡とも重複するものであった。特に、「帝国大学」に対する「無冠」の「大平民」の抵抗は、「衛生局派」としての後藤が大いに共感する姿勢であったに違いない。その意味で、伝染病研究所設立・移転問題は、福沢と後藤の関係、そして後藤の福沢認識を深める上で、大きな役割を果たしたといえよう。

（1）「男爵後藤新平氏直話」（箒庵高橋義雄編『福沢先生を語る―諸名士の直話』岩波書店、一九三四年）、二五―二六頁。この直話は、一九一二年から二年の間に高橋義雄が「諸名士」から聴きとった福沢に関する所感のひとつである（高橋義雄「自序」、同前、五―六頁）。

（2）前掲「男爵後藤新平氏直話」、二六―二八頁。福沢は一八八九年頃、慶應義塾長の適任者を探しており、長与専斎の推薦を受けて後藤と面会したが、義塾関係者から義塾出身者を採用すべきだという反対論が起こり、沙汰止みになったという（鶴見祐輔著／一海和義校訂『〈決定版〉正伝　後藤新平』第一巻、藤原書店、二〇〇四年、四七九―四八一頁）。

（3）前掲「男爵後藤新平氏直話」、二九頁。

（4）前掲『〈決定版〉正伝　後藤新平』第一巻、六七四―六八五頁。小島和貴は、内務省衛生局で上司と部下の関係にあった当時、後藤と北里の「二人のライバル関係に専斎も当初は頭を痛めたという」としている（小島和貴『長与専斎』長崎文献社、二〇一九年、二五〇頁）。互いにドイツに留学し、北里がコッホのもとで顕著な業績を挙げるなかで、両者の関係性も変化していったのであろう。

（5）小川鼎三・酒井シヅ校注『松本順自伝・長与専斎自伝』（平凡社、一九八〇年）、一八一―一八三頁。

（6）山内慶太「長与専斎・北里柴三郎―福沢諭吉と「医友」」（『三田評論』第一〇八七号、二〇〇六年二月）、六五―六六頁。

（7）後藤新平「福沢先生の追想」（立石駒吉編『後藤新平論集』忠誠堂、一九一一年）、七頁。

（8）慶應義塾編『福沢諭吉書簡集』第七巻（岩波書店、二〇〇二年）、二三二頁。

（9）「伝染病研究所と近辺の人民」（『時事新報』一八九三年四月二日付）。

（10）「伝染病研究所に就いて」（『時事新報』一八九三年七月五日・六日・七日付社説）。

（11）「伝染病研究所の始末」（『時事新報』一八九三年八月一一日・一二日付社説）。

（12）前掲『福沢諭吉書簡集』第七巻、二五七頁。

（13）以上、福沢の伝染病研究所移転問題に関する関与については、前掲「長与専斎・北里柴三郎―福沢諭吉と「医友」」、六五―六六頁、参照。

（14）前掲『〈決定版〉正伝　後藤新平』第一巻、六八五―六八八頁、宮島幹之助・高野六郎編『北里柴三郎伝』（北里研究所、一九三二年）、六一―六八頁、山口梧郎『長谷川泰先生小伝』（長谷川泰先生遺稿集刊行会、一九三五年）、一二四―一五六頁。長与自身はその自伝で、伝染病研究所設立に対する福沢の貢献を称えた上で、長谷川などによって提起された伝染病研究所補助費が帝国議会を通過し、「さらに現今の場所愛宕下に改築し、官民両翼の姿となり、病菌の発見、血清の製造等研究所の成績は日にますます顕われ、政府はさらに国立の血清薬院を設けて全国の需用に供して」きた、と淡々とつづっている（前掲『松本順自伝・長与専斎自伝』、一八二―一八三頁）。なお、富田に「伝染病」の三字を避けるよう提案したのは福沢であり、福沢は一八九三年四月七日付富田宛書簡で、伝染病研究所に関する「芝区之苦情」に対し、「伝染病と言はすして、何とか外之名ニ取替へては如何。実に訳けもなき事と存候。区内之者も伝染病之三字ニ恐るゝのみ。……東京府ニ而何とか御工夫ハなかるへきや」と述べている（前掲『福沢諭吉書簡集』第七巻、二三三頁）。ただ、福沢は同日付の富田宛書簡で、「今朝一書を認め、伝染病研究所之義ニ付云々申上候次第……実ニ差出がましき次第、飛んだ事を申上けたりと、今更後悔致し候」とすぐにこれを撤回している（同前、二三四頁）。富田が福沢の撤回にかかわらず指示を出したのは、長与がこれを妙案として推したためかもしれない。

(15) 長谷川泰「伝染病研究所は市内に置くも妨げなし」(『時事新報』一八九三年六月四日・六日付附録)。
(16) 前掲『長谷川泰先生小伝』、一三六頁。
(17) 前掲「伝染病研究所は市内に置くも妨けなし」。
(18) オンライン版「後藤新平文書」、資料番号・443-011。文中の「山県氏」とは、一八九三年三月一一日まで第二次伊藤内閣で司法大臣を務めていた、山県有朋のことであろう。
(19) 前掲『北里柴三郎伝』、一六一頁。
(20) 前掲『〈決定版〉正伝　後藤新平』第一巻、六八九—六九〇頁。
(21) 前掲『〈決定版〉正伝　後藤新平』第一巻、六九〇頁。
(22) 前掲「後藤新平文書」、資料番号・297-001c。
(23) 前掲「後藤新平文書」、資料番号・715-001c。
(24) 前掲『〈決定版〉正伝　後藤新平』第一巻、六九一—六九二頁。
(25) 前掲「後藤新平文書」、資料番号・764-001c。
(26) 前掲「福沢先生の追想」、七頁。
(27) 『読売新聞』一八九三年一一月一九日付朝刊、一二月一五日付朝刊。
(28) この頃、後藤は各地で演説しているが、伝染病研究所設立・移転問題には言及しておらず、あくまで「裏面」での活動に徹していた感がある。当時刊行された後藤の演説筆記は、下記の通り。宮部政厚記『後藤新平君演説筆記』(大日本私立衛生会神戸支会仮事務所、一八九二年)、西本茂吉記『後藤内務衛生技師演説筆記』(赤穂郡、一八九二年)、永木誠太郎記『後藤内務技師演説筆記』(兵庫県明石郡、一八九三年)、後藤新平述『赤痢病ニ関スル演説筆記』(小林常吉、一八九三年)。
(29) 志村俊郎・都倉武之「長谷川泰と慶應義塾—福沢諭吉との接点を中心に」(『日本医史学雑誌』第五九巻四号、二〇一三年一二月)、四六九—四八五頁。長谷川と福沢および慶應義塾との関係については、同論文、および志村俊郎・都倉武之・西澤直子・唐澤信安・山本鼎・殿崎正明「慶應義塾出身名流列傳に見られた済生学舎長谷川泰と泰に纏わる幾らかの書簡」(『日本歯科医史学会会誌』第三〇巻二号、二〇一三年四月)、一七八頁、など参照。

(30) 前掲「福沢先生の追想」、七頁。

(31) 慶應義塾編『福沢諭吉全集』第二一巻（岩波書店、一九七一年）、三七七―三七八頁。この書簡、および福沢の台湾植民論と後藤の台湾統治政策との関連などについては、藤原敬子「福沢諭吉の植民論―後藤新平の台湾統治政策と関連して」（『福沢諭吉年鑑』第一三号、一九八七年二月）、一三九―一五九頁、参照。

(32) 前掲「後藤新平文書」、資料番号・W3-1787-1。

(33) 前掲「福沢先生の追想」、七―一五頁。この点などについては、中島純「評伝『国民教育家』後藤新平⑪」（『東京』第一一巻一三二号、一九九三年一二月）、三〇―三一頁参照。後藤は別の談話で、福沢を「非常にサイエンティフィツクな人」と呼び、「此サイエンスを通俗化して一般衆庶の間に知らしめるといふのが先生の根本目的」であった、などと述べている（「後藤新平談」、石河幹明『福沢諭吉伝』第四巻、岩波書店、一九三二年、六七一頁）。福沢は相馬事件にあたっても後藤を弁護しているが、この点については、前掲『福沢諭吉伝』第四巻、七三四―七三七頁、参照。